

連体形から終止法の出現

—日本語の古語「と言ひたる」の例—

玉 地 瑞 穂

On the emergence of conclusive form from attributive form:
Evidence from *to ihtarū* in classical Japanese

Mizuho TAMAJI

要 旨

本研究では日本語の古語「と言ひたる」が「言う」という動詞の語彙的意味から引用の用法へと発展していく過程と連体形であった「と言ひたる」が終止法として用いられるようになっていく過程の関係を考察する。通時的研究により、その過程は次のように要約される。連体形である「と言ひたる」が名詞化することにより「と言ひたる」を含む部分が従属節として使用されるようになったこと、さらに従属節である「と言ひたる」に係助詞である「也」が接続して「と言ひたる也」となることで主節の省略が起こったことになって終止法「と言ひたる也。」が出現するに至った。また、係り助詞の存在が連体形と名詞化構造を関係づけ、連体形が終止法として使用されるようになったことが日本語においても確認されたことは、非終止形である名詞化構造が独立した終止法へと発展していくと主張する Nominalist Hypothesis を支持する結果となった。

キーワード：連体形、終止法、引用、従属節の独立、Nominalist Hypothesis

1. はじめに

動詞「言う」が引用や伝聞証拠性 (hearsay evidential) へと発展していく現象が、多くの言語で確認されている (Aikhenvald 2004, Yap & Ahn 2011)。日本語の「って」は、その例である。「って」は格助詞「と」と動詞「言う」の活用形である「言って」から成る「と言って」から派生したと考えられている (例：三浦1974, Suzuki 2007)、次の例文(1)は引用、(2)は伝聞の用法である。

(1) 母が先生によろしくって、言っていました。

(2) 明日は雨が降るって。

「て」は一般的に動詞の進行形を表す。「って」が「と言って」から派生したと考えられているなら、「って」も動詞「と言う」の進行形と考えられる。しかし、上記の例(2)が示すように、文末で使用されている。例(1)についても、「言っていました」は省略可能である。

このように、非終止形のものが引用や伝聞の機

能を持つようになると、終止法として使用されるようになることが報告されている（e. g. Nikolaeva 2007）。本研究では、「って」と同様、古典日本語において「言う」を表す活用形のひとつで連体形の「と言ひたる」が引用や伝聞の機能を獲得する過程と非終止形から終止法へと発展していく過程の関係を考察する。

2. 本研究の目的

現代日本語では動詞の連体形と終止形は同じ活用形であるが、古典日本語においては動詞の連体形と終止形が別の活用形で表されるものがあった。本研究で対象とする「と言ひたる」は連体形であるが、終止形は「と言ひたり」である。次の例文(3)は「と言ひたる」、(4)は「と言ひたり」の使用例である。

(3)「まことにや、やがては下る」といひたる人に、思ひだにかからぬ山のさせも草誰かいぶきのさとはつけしぞ。 （枕草子, 996, pp.322）

(4)「びんなきことなど侍りとも、なほ契り聞えしかたは忘れ給はで、よそめにては、さぞとは見給へとなん思ふ」といひたり。 （枕草子, 996, pp.125）

このような連体形と終止形の区別は、係り結びの崩壊によって曖昧になっていったと考えられている。係り結びとはある種の係助詞ゾ・ナム・ヤ・カが現れる場合は連体形で終止し、コソが上に現れる場合は、已然形で終止するという法則である。係り結びという事象は、奈良時代においてはきわめて顕著であるが、平安時代になると少しずつ変化が進行し、室町時代になると古い終止形（例：と言ひたり）は使われなくなり、連体形が終止法と連体法とを兼ねて使用されるようになったと考えられている（大野 1993, pp.345）。

本研究では古典日本語において動詞「言ふ」から派生した連体形である「と言ひたる」を対象と

して、連体形が終止法として使用されるようになった原因が、係り結びの崩壊の他に、Nominalist Hypothesis（例：Starosta, Pawley & Reid 1982, Kaufman 2009）が主張するように連体形が従属節的用法として使用されるようになった結果、名詞化構造が独立した終止法へと発展していったという可能性を考察する。

3. 調査方法

本研究で用いるデータは8世紀から19世紀（江戸時代）までの文学作品を基に編集された大系本文データベースである。大系本文データベースには「と言ひたる」とともに「といひたる」という表記も見られたので、「と言ひたる」と「といひたる」の双方を対象とするが、本研究ではどちらも「と言ひたる」と表記する。そして、それぞれの機能（「言う」という動詞の語彙的意味、引用、伝聞など）と形式（連体法、従属節、終止法など）の組み合わせが1世紀ごとに確認された個数を調査する。

4. 調査結果

調査の結果、76個の「と言ひたる」が大系本文データベースの中では確認された。「と言ひたる」が最初に確認されたのは10世紀に書かれた大和物語で、最後に確認されたのは19世紀であった。

連体法として使用されたものには、例文(3)の「と言ひたる人」というように「と言ひたる」が修飾する名詞（head noun）が存在する。これらは10世紀から19世紀までの間に17個確認された。

そのうち引用の用法は下の(5)を含む2つで、残りはすべて動詞「言う」の語彙的意味用法であった。ちなみに、例文(3)は「言う」の語彙的意味用法である。

(5) 繪にかきおとりするもの。なでしこ。菖蒲。櫻。物語にめでたしといひたる男・女のかたち。 （枕草子, 996, pp.165）

また、下の例文(6)のように「と言ひたる」が修飾する名詞が省略されているものも確認された。

(6) 供なるをのこ・童など、とかくさしのぞき、けしき見るに、「斧の柄も朽ちぬべきなめり」と、いとむつかしかめれば、長やかにうちあくびて、みそかにと思ひていふらめど、「あなわびし。煩惱苦惱かな。夜は夜中になりぬらむかし」といひたる、いみじう心づきなし。

(枕草子, 996, pp.109)

(6)は、あらかじめ想定された話題について言及していることが明示的であるため、「と言ひたる」が修飾する名詞を省略して「と言ひたる」が名詞化したもの (nominalization) と考えられる。また、(6)の「といひたる,」は「と言うのが」という意味で使用されることから、名詞化されたものが従属節として使用されたものと考えられる。また、(6)においては発話部分の主語が明確なことから(供なるをのこ・童など)引用の機能をすると考えられる。このように、「と言ひたる,」という形は10世紀に3個、14世紀に1個確認されたが、いずれも従属節の形で引用の用法として用いられていた。

また、下の例文(7)と(8)のように名詞化されたものに「は」や「に」などの助詞が接続するものもある。

(7) 「これはいかが」といひたるに、ただ「早く落ちにけり」といらへたれば、

(枕草子, 996, pp.165)

(8) 又おさなき子の二、三なるが、物を持ちて、人に「是」といひたるは、心ざしはあれどもさだかにいひやらぬにもたとへたる也。

(歌論集正徹物語, 1450, pp.172)

これらは、名詞化されたものが従属節として使用されているもの典型的な例と考えることができる。このような「と言ひたる」に助詞が接続しているものは30個確認されたが、そのうち引用の用法のものは4個で、残りは動詞「言う」の語彙的意味の用法であった。

これらの連体法や従属節の他、文末助詞を伴って文末に位置する「と言ひたる」も確認された。例えば下の例(9)のようなものである。

(9) 右近が初瀬へ参りて、玉鬘に逢ひたる事を、歸りて源氏に語るとて、「あはれなりし山ぶみにて侍りし」といひたる也。

(歌論集正徹物語, 1450, pp.173)

このような用法は5個確認され、全て(9)と同様「と言ひたる也。」という形で引用の用法として用いられていた。また、それらは全て15世紀に確認され、それ以降見られることはなかった。「也」は文末助詞「なり」であることから、「也」より前の部分を強調し、その後続く主節が省略されたもの (main clause ellipsis) と考えられる。したがって、これは主節の省略によって従属節が独立したもの (insubordination) (Evans, 2007) と考えられる。この過程をまとめると図1ようになる。

第1段階	VP と言ひたる也、 従属節	VP. 主節
第2段階	VP と言ひたる也。	(VP) 省略

図1 「VP と言ひたる也。」出現の過程
(VP: verbal phrase)

次の表1は、10世紀から19世紀までに確認された「と言ひたる」の形式と用法が出現した数を1世紀ごとに表記したものである。

表1 「と言ひたる」の形式・機能ごとの出現数

形式・機能	年代									
	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀
連体法・「言う」	5	4		3		5		3	1	3
従属節+助詞・「言う」	17	3	3	6		7				1
連体法・引用	1	1								
従属節・引用	3				1					
従属節+助詞・引用		2	1						1	
終止法+也・引用						5				

5. 考察

以上のことから、「と言ひたる」は連体法、従属節、終止法という形式で使用され、動詞「言う」の語彙的意味と引用の用法で使用されていたことがわかった。また、「と言ひたる」の伝聞の用法で使用された例は確認されなかったが、引用の機能を獲得していくようになると連体形だった「と言ひたる」が終止法として使用されるようになることも確認された。そして、「～なむ…と言ひたる。」や「～ぞ…と言ひたる。」のような係り結び

による終止法の「と言ひたる」が確認されなかったため、係り結びの崩壊によって終止形と連体形の使用が曖昧になったため連体形が終止法として使用されるようになったかどうかを確認することはできなかった。

連体形の「と言ひたる」から終止法としての「と言ひたる」へと発展していった過程をまとめると次の表2のようになる。なお、*で記したものはデータの中では確認されなかったが存在していた、あるいは存在することが可能と考えられる段階であることを示している。

表2 連体形「と言ひたる」から終止法の「と言ひたる」の出現過程

段階	式	形
第1段階	連体修飾形	VPと言ひたる N
第2段階	名詞化	VPと言ひたる VP*
第3段階	従属節化	VPと言ひたる, VP
第4段階	従属節+助詞	VPと言ひたる PT, VP
第5段階	従属節+係助詞	VPと言ひたる也, VP*
第6段階	従属節+係助詞, 主節の省略	VPと言ひたる也。
第7段階	係助詞の省略, 従属節の主節化	VPと言ひたる。*

(VP: verbal phrase, N: noun, PT: particle)

6. 結論

本研究では古典日本語の「と言ひたる」を対象に、連体形が終止法へと変化していく過程と動詞の意味変化の関係を分析した。その結果、連体形が名詞化することによって従属節として使用され

るようになったこと、さらに従属節に係助詞が接続して主節の省略が起こることが名詞化構造が独立した終止法へと発展していったものと考えられるという知見を得た。このような現象が日本語においても確認されたことは、Nominalist Hypothesis を支持する結果となった。

文献

- Aikhenvald, Alexandra. (2004) *Evidentiality*, Oxford University Press.
- Evans, Nicholas. (2007) Insubordination and its uses. in Nikolaeva, Irina (ed). *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundation*. 366-431. Oxford: Oxford University Press.
- Kaufman, Daniel.(2009) Austronesian typology and the nominalist hypothesis. in Alexander Adelaar & Andrew Pawley (eds.) *Austronesian Historical Linguistics and Culture History: A Festschrift for Robert Blust*. 187-216. Canberra: Pacific Linguistics.
- Nikolaeva, Irina. (2007) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundation*. Oxford: Oxford University Press.
- Starosta, Stanley, Andrew K. Pawley, and Lawrence A. Reid. (1982) The evolution of focus in Austronesian. in Amran Halim et als (eds.) *Papers from the Third International Conference on Austronesian Linguistics, Volume 2: Tracking the Travelers*. 145-170. Canberra: Pacific Linguistics.
- Suzuki, Ryoko. (2007) (Inter) subjectification in the quotative *tte* in Japanese conversation: local change, utterance-ness and verb-ness. *Journal of Historical Linguistics*, 8(2): 207-237.
- Yap, Foong Ha, & Karen Grunow-Härsta & Janick Wrona. (2011). Nominalization strategies in Asian languages. in Yap, Foong Ha et als (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*. 1-57. Amsterdam: John Benjamins.
- 三浦昭 (1974) 「『と』と『って』」『日本語教育』24 : 23-28.
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』岩波書店